

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

歴史とは 1

その 280

唯今から 日本と世界の歴史について話を進めることとするが、そもそも歴史とは何なのであろうか。

歴史は過去についての記述である。そうは言っても過去に起こったその日その日の出来事を ただ羅列していけば歴史ができるというものではない。一人の人物の歴史にしても ただその人の毎日の行為を羅列しても何の意味もない。

行為には意図・目的がある。社会・国家・世界との関わりがある。その歴史の記述には歴史を書く人の判断が必要である。さらに考えてみよう。

人の見たこと聞いたこと、やったこと等々全ての経験は頭脳に記憶として印画される。表面の記憶が忘れされると潜在意識に保存される。その記憶の総量は血筋として子孫に受け継がれる。

かくて現在に生きる一人の人間の頭脳には 人類始まって以来の出来事がすべて印画されていることとなる。

またこうも言える。過去は既に過ぎ去ったことで存在してはいない。将来はまだ来ないもので、これも実在するものではない。あるものは ただし一瞬一瞬の今だけである。

この今を古神道で中今（なかいま）「続日本紀」という。

人が何かをしようとする場合、この中今の中に観念的な記憶としてあるものの中から行為に必要なものを想起して、それを止揚し参考にし、再編成・再構築して一つの行為を想像して行く。

どの記憶を取り出して、どのように構成して行くかはその人の判断で決まる。歴史を書くにも同様記述者の判断が加わる。歴史が書く人の判断の基礎となる人生観の影響を受けることを否定することは出来ない。そこに問題がある。

その 281 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

歴史とは 2

その 281

人間の性能は言霊ウオアエイ五段階の次元に発現する。歴史を書く人が上述の五段階のうち 言霊ウ・オ 二段階の自覚しかもっていない場合、当然歴史は言霊ウ・オの次元すなわち人間の欲望と経験値の二段階のみの見地より書かれることとなる。

そして言霊ア・エ・イの三段階すなわち芸術・宗教・道徳・言霊そのものという立場は無視されてしまう。ひとりの人間を描写するのに欲望と知識の見地からのみして、感情・道徳・意志の判断を無視するならばその人物描写はきわめて 偏頗（へんぱ）なものになってしまうであろう。

歴史の記述も同様である。

戦前の歴史をまた戦後のそれをも極めて偏頗（へんぱ）なものたらしめている原因はすべてそこにあ

る。

言霊ウ・オ・ア・エ即ち人間の現識も経験知も感情も道德智もそれぞれすべて人間の全人格すなわち言霊イである生命意志に統括されているものとしての現識であり、経験値であり感情であり道德智であるはずなのである。一つないし二つの性能の独走の判断に基づく歴史は真実の歴史ではない。

言霊五十音による人間生命の全構造が明らかになった現在、日本のそして世界の真実の歴史を提示することが初めて可能となった。

万葉の時代を理解するために万葉人の心に帰らねばならぬ。日本と世界の歴史を誤りなく伝えるために人間の生命構造の全局の見地に立つことが必要である。この意味から人間生命の全体の学である言霊原理に則った日本と世界の歴史の大略を提示することとしよう。

その 282 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

歴史とは 3

その 282

歴史の黎明 （言霊原理の発見）

人間の歴史の始まりはいつであるか。諸説がある。しかし究極的には歴史の始まりは言葉と数と文字の発生の時であるといえることができる。言葉がなければ人間の文化はなく、またそれを保持・伝達・継承することもできない。言葉は文明の母（いろは）であり 数は文明の父（かず）である。

人類は大昔いつの頃からか自分の中なる心の存在に気づき、その心の内容を把握し表現する色々な方法を考案し始めた。言葉や図形や符号等である。その考案・研究の中で心と言葉との関連の問題はその中心課題であった。

その研究には長い長い年数を要したことであろう。この時が人類の精神文明の 揺籃時代といえることができる。いつしか心と言葉の研究者たちが一カ所に集まり研究・討議が行われるようになった。古事記・日本書紀が形而上的に高天原と呼んでいることからして多分地球上の高原地帯— チベット・パミール・アフガニスタン辺りであったろうか。

ついにその研究者集団は人間の心の構造とその構成要素並びにその運用法を余すところなく解明することに成功した。その時期は現在より約八千年ないし一万年以前と推定される。スメール文明より以

前のことである。

解明された精神原理によれば、精神の究極構成要素先天十七・後天三十二・文字化一合計五十であり、これはアイウエオ五十音をそれぞれに当てはめて言霊（ことだま）と呼んだ。五十の言霊の運用操作法五十計百個の原理である。

またその五十音言霊とその操作方法によって人間が持つ五つの性能の典型的な規範が定められた。

言霊イに即した構造を表す天津菅麻音図、言霊エの操作方法として天津太祝詞音図・言霊アの心の持ち方として宝音図・言霊オの操作方法として赤球音図・言霊ウの操作方法として天津金木音図である。

その 283 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

歴史とは 4

その 283

また社会を運営して行く上で協力して行くべき三つの異なる分野がはっきり示された。三権分立である。

このことを古事記は次の如く示している。

この時伊耶那岐の命いたく歎ばして詔りたましく、「吾は子を生子生みて、生みの終（はて）に、に三柱の貴子（うずみこ）を得たり」と詔りたまえて、すなわちその御頸珠の玉の緒ももゆらに取りゆらかして、天照大御神に賜ひて詔りたまはく、「汝が命は 高天原を知らせ」と こと依さし賜ひき。かれその御頸珠の名を御倉板拳（みくらたな）の神という。御倉板拳の神という。次に月読の命に詔りたまはく、「汝が命は世の食国を知ら」とこと依さしたまひき。次に建速須佐の男の命に詔りたまはく、「汝が命は海原お知らせ」と言依さしたまひき。

以上が古事記神代の巻きにおける三柱の貴子である天照御大神・月読命・建速須佐男命の三権分立の宣言であるが、この世界の経営における精神原理としての三権分立は以後の人類歴史を決定して行く重要な要因として働くこととなる。

ここで高天原とは言霊布斗麻邇の原理である言霊の幸倍（さちあう）の国のことであり、夜の食国（よのおすくに）とは天照御大神の保持する言霊の光のない夜の国の思想の基の学問、すなわち宗教・哲学・芸術の分野のことであり、海原（うなばら）とは言霊ウの名の領域（はら）である産業・経済・科学の分野のことである。

それぞれの分野を言霊で示せば天照御大神は言霊イ・エ、月読命は言霊ア・オ、建速須佐の男の命は言霊ウ・オの領域である。そして以上の言霊原理の発見者である聖（ひしり）の集団の代表者の

名前を古事記で伊耶那岐大神と呼ぶのである。

その 284 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

歴史とは 5

その 284

運命社会創造への出発 （天孫降臨）

時が来て高天原の霊知りの集団の中から選ばれたものが、言霊五十音の原理をもって理想社会を創るために地球上の適当な平地に向かって出発することとなった。理想社会とは、生命の究極構造の原理に則って物や事の名前を定め、その名前そのままの実相が明らかに生かされる様な世の中ということである。

この社会創造の責任を負った人物を邇邇芸命（ににぎのみこと）と言う。第二次的の更に 第二次的なすなわち第三次的な技を操作する人の意味である。実相即名である言霊は第一次的である。その言霊を組み合わせることによって命名された事物の名前は第二次的である。その事物の名そのままが生かされて矛盾のない社会の創造即ち政治とは第三次的な芸術というわけである。またこの代表者の創造のための平地の出発を記・紀は天孫降臨という。

天孫降臨の時を期した古事記の文を掲げよう「天照御大神高木の神の命もちて……ここにその 招（を）ぎし八尺の勾玉、鏡、また草薙の剣、……賜ひて詔りたまはく「この鏡は、もはら我が 御魂として、吾が御前を拝くがごと、齋まつれ。」

これを天孫降臨に際して天照大神の神勅という。この意味は人類文明創造の任にあたる最高の責任者は勾玉・剣・鏡の三種の神器に象徴される言霊布斗麻邇の原理を自覚し奉戴して行ふべし、という命令である。

蟹は甲羅に似せて穴を掘るという。人類は人類本具「本来備わっている」の性能に基づいて文明を創造して行く。その性能の及ぶ範囲以外に出ることはなく、範囲を縮減することもない。

それゆえ先に述べた伊耶那岐の大神の三権分立の統治の宣言とこの天孫降臨の天照大御神の命令とは共に人間生命本具の究極構造であるアイウエオ五十音言霊の原理に根ざした基本活動法則であるがゆえに、以後の人類文明創造の歴史を貫く大動脈となり眼目となる。天孫降臨以来今日に至るまで、また今日より人類がその種を保持する限り永遠に、人類の歴史はこの二つの宣言を^{まっしぐら}枢軸として展開して行くこととなるのである。

その 285 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

歴史とは 6

その 285

さて三種の神器で象徴される五十音言霊の原理を体得・保持して文明の創造のために地球上の適地を目指して天降った人間の集団が最後に行き着いたところはどこであったか。「ここに^{そじし}隣肉（そじし）の^{から}韓（からくに）を^{かささのみさき}笠沙之前（かささのみさき）に^ま求（ま）ぎ通りて詔りたまはく、ここは朝日の^{たださ}直刺（たださ）す国、夕日の日照る国になり。かれ^{ここ}此地（ここ）ぞ^い甚（い）吉（よ）き地とのりたまひて、底津石根（そこついわね）に宮柱太しり、高天原に^{ひぎたか}氷椽高（ひぎたか）しりてましましき。」（古事記）とあるからには、西の方より朝鮮半島を経てこの日本の地に落ち着いたものとみるのが妥当であろう。この国を^{ひもと}霊の本と呼ぶ語源である。

ここに今まで言霊の原理を勉強していただいた方には蛇足と思われるであろうが、念のために付け加えることがある。古事記・日本書紀の記事を掲げたり日本の国名を霊の本などと言うと、敗戦以後の日本の歴史観からのみ考える人々にはまさに戦前の民族主義の亡霊がよみがえってきたように感じられるかもしれない。

しかしながら 一度眼を人間とはそも如何なるものかの問題に向け、今・此所（いま・ここ）に活動している自分自身の心の構造を直視して、言霊五十音布斗麻邇の原理を理解するならば、これから説く本著の日本ならびに世界の歴史が狭隘（きょうあい）な民族主義的観点からではなく、純然たる人間精神科学の最奥の原理・法則に則った真実の歴史書であることを了解するであろう。

その 286 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

歴史とは 7

その 286

日本の歴史 1

いわゆる天孫降臨は約八千年以前の出来事と推定される。この時より世界の政治文化の歴史は日本を中心に展開されることとなる。政治という言葉を使うと現代人は直ちに現代の如き武力・経済力をバックとした権力の政治のみを想起されるであろう。

しかし天孫降臨後のそれは全く様相を異にしたものであった。言葉の原理による道理と人類愛、言い換えれば英智と愛による道德の政治の時代であった。神聖にして真実なる宗教的道義の政治とでも言ったら理解しやすいかもしれない。

かくて言霊の原理の体得者である霊知りの集団の日本への降臨以来、神倭朝一代神武天皇に到る代約五千年と推定される期間大道の政治が続くこととなる。この間古文献には邇邇芸王朝（ににぎ）・彦火火出見王朝（ひこほほでみ）・鵜草葺不合王朝等（うがやふきあえず）の経綸が入れ替わり続いたことが記されている。

それぞれの王朝は十数代或いは数十代の天皇が皇位に就いた（それら王朝の代々の天皇名とそれぞれの統治の記録については竹内文献のその他の古文書に詳しく記せられている。そのうち竹内文献の紹介書である昭和 39 年出版の山根キク著「世界の正史」を参照されたい） 各王朝の責任を天津日嗣天皇（あまつひつぎすめらみこと）と言う。

天津日嗣とは人間が人間のあるべき究極の真理である言霊の原理の自覚を受け継いでいると言う意味である。天皇はこの真理を保持して世界中の人々の言葉を統べる人の意味である。それぞれに靈知りであった。

ここ三千年程における権力政治の渦中にあたり、統合の象徴といった飾り物の天皇のことではなかった。

古代の歴史書としては竹内古文書の他に大伴・物部等の古文書、その他富士宮下子文書・大友の上記・安倍古文献などがある。

その 287 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

歴史とは 8

その 287

天皇の仕事の第一はあらゆる事態に処して言霊の原理に則って事物に名前をつけることである。またその名の示す事物の内容と対処の方法（それらを文化と言う）を広く世界に広めることであった。伝達の手は現代より遅かったかもしれぬ。しかし着実にその文化は世界に広められた。まさに「世界は一つの言葉なりき」の時代である。

古文献によれば各王朝の天皇は即位後長い年月をかけて世界各地を巡幸されている。また逆に世界の各地から霊の本の真理の徳と文化を求めて人々が日本に来朝したことである。

代々の天皇の即位式には世界中の王達が参列した。歴代天皇の御霊を祀った廟を皇祖皇太神宮

(すみおやすめらおほたましたまや) と呼んだ。外国の王が死ぬとその遺骸 (なきがら) は日本に運ばれて葬られた。その廟を別祖太神宮 (そとつみやおほたましいたまや) と言う。現今の伊勢神宮の内宮・外宮の古代における形式である。

その 288 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

歴史とは 9

その 288

邇邇芸王朝とは先に示したごとく第一義である言霊から数えて第三的な人類の社会文明創造の政治を布 (し) いた初めての王朝であり、第二番目の彦火火出見王朝とは彦すなわち霊子 (ひこ) である言霊原理に則ってその成果 (火即ち穂) が華やかに咲き揃った (出見) 王朝の意味である。

この時代において大道の道德政治は隆盛の時代を迎えたことがわかる。かくて天孫降臨以来世界には

長い間精神文明の花が咲いていた時代が続いていたのである。この初めの人類の精神文明の期間を第一文明時代という。

次に起こった鵯草葦不合王朝も引き続き精神文明が全世界に行き渡った時代であった。中国においてはこの精神原理を白法と呼び、それによる政治を結繩の政と称す如く、理想の政治を制いた神話化される三皇・五帝もこの時代の人々である。

「三皇五帝とは、中国のか夏の時代よりも古い伝説的な聖人たちのこと。三皇とは燧人（すいじん）氏・伏羲氏・神農（しんのう）氏の三聖人を指す。また五帝とは黄帝・帝顓頊（ていせんぎよく）・帝嚳（ていこく）・堯（ぎょう）・舜（しゆん）のこと」これらの人物が単に伝説的のみでなく明らかな実在者であったことの証拠を示すために次の文を引用しよう。

その 289 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

歴史とは 10

その 289

周易繫辭上傳（しゅうえきけいじじょうでん）に「この故に天神物生じて、聖人之に則り、天地変化して、聖人之に效（なら）ひ、天象を垂れ吉凶を見（しめ）して、聖人之に象（かたど）り、河・図を出し、洛・書を出して、聖人之に則る。」とある。またその註に「河は黄河、洛は洛水。古昔伏羲は黄河より出たる神馬の文に則り八卦を画し、禹（う）は洛水を治めて神亀（しんき）を獲、その背文に因りて洪範（こうはん）をつくれりとの伝説あるをいう。然れどもこの真否は今之を詳する能はず」とある。

しかるに上述の河図・洛書といわれる易の洪範が単なる神馬の文とか亀の背文の如き呪物ではなく、日本語の語源原理である言霊布斗麻邇の原理によってその実態が明示された今日においては、河図・

洛書に則って政治をしたといわれる伏羲・禹の如き人物も実在し、それらの 結繩の政の時代も実在したことがうなづけるであろう。

しからば古昔（こせき）実在したものがなぜ 後代神話化と同時に架空のものになってしまうのか、その間の事情については 後段詳しく触れることとなろう。日本・中国ばかりでなく 印度・ギリシャ・北欧等の神話の中の太古の理想世界の記述は右と同様し現に存在した事実であって、決して架空の理想像的なものではないことは、一度言霊原理の内容に踏み切った人々にはなるほどと首肯されるところのものである。

鵜草葺不合王朝の時代は右の如く人類の第一文明である精神文明の花咲く時代であったが、同時にその王朝の名が示す如く人類の第二の文明と言うべき物質文化の芽が出てくる萌しの 時代でもあつ

た。鵜草とは人間の現識・欲望である言霊ウの神屋（かや）即ちいわゆる化学の構造・内容がまだ完成されていない葦不合（ふきあえず）時代という意味である。

この時代は三権分立における天照大御神の精神原理による第一文明の完成時代であると同時に、やがて到来するであろう人類の第二文明であり、三権分立のける月読命・建速須佐の男の命の系列の文化の萌しの見えた時代でもあった。次の章においてこれらの文化発生については外国（日本以外の国）の状況ならびに日本と外国との交渉の経緯について説明しよう。鵜草葦不合王朝の終りは今より約三千年以前のことである。

その 290 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

歴史とは 11

その 290

外国の歴史 1

伊邪那岐大神の三権分立の宣言によって天照大御神は高天原を治めることになった。その精神分野は現象を見る主体側の精神の究極構造である五十音言霊の世界であり、その実際の地は言霊幸倍う（さちは）国日本であり、この原理に則る道德・政治の実行は邇邇芸・彦火火出見・鵜草葺不合の三王朝の期間に十分に完成された。

三権のうち残りの月読命・建速須佐の男の命の活躍はいかになったであろうか。須佐之男命は海原を治めることである。人間の現識に則る世界分野である。現象の客体側の内容の究明がその仕事である。

今で言う物質化学・産業経済の分野である。この仕事は見識である言霊ウに則って事物を破壊・分析することが始まる。それ故に精神文明の完成された高原日本で行うわけにいかず、古事記における天照

大御神と須佐男の命の確執の経緯に示される如く須佐之男命は高天原からの「神逐ひ」（かむやらい）の形式で母神伊耶那美神がいます 四方津国（よもつくに）へ出かけて行った。須佐之男命はいわば科学の研究集団といえる。

この集団が成功し目的を達するためにはこれより現在まで長い数千年の年月を要するのであり、その長い年月の活動が人類の歴史に複雑な要素を呈せしめることとなる。

次に三権の残りの 1 つは月読命が知らず夜の食国（おすくに）の分野である。昼の光である 天照大神の言霊の自覚がなく、それゆえ夜のうすぼんやりとした呪示象徴を事とする概念理論の分野の仕事である。哲学・宗教・芸術の世界である。故にこの仕事も高原日本でない外国を舞台として進められるべきこととなる。この二つの分野の仕事の推進をもととして外国の歴史を見ることにしよう。

その 291 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

歴史とは 12

その 291

日本を出発した須佐男の命の集団は朝鮮半島に渡り、建国した。壇君（だんくん）国と呼ばれる。次いで中国東北部・北部に進み、続いて印度にまで達した。中国東北部に建てた国は商又は殷と称せられる。殷は西域から入ってきた異民族によって滅ぼされた。その国の名が周である。

中国の古代科学である練丹還金術や本草学・漢方医学等は 須佐之男命の集団またはその末裔が興したものであり、言霊布斗麻邇の原理を客観世界の研究（科学）に応用しようと試みたところのものである。

時代が下って周の後に起こったのが秦の始皇帝 BC 紀元前 221 年はこの練丹還金術を奨励し、その研究者である方士を重用したと伝えられる。始皇帝が「不老長寿の薬」を求めんと 臣の徐福を日本に派遣したことは有名な伝説である。「不老不死の薬」とは精神的な宝ものである言霊布斗麻邇の原理を指すことは言うまでもない。

言霊原理こそ人類の種が存在する限り永劫に保持される人間精神の構造そのものであるからである。現在徐福の墓は和歌山県新宮市にある。

その 292 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

歴史とは 13

その 292

読命集団の仕事は 精神的探求の中からその中枢である言霊原理だけを除いた他一切の研究である。言霊の代わりに概念・数・象形文字・呪文等を用いた研究である。月読命集団は中国の易の基本である河図・洛書を伝え、印度における古代宗教の基礎を築いた。さらに広く世界に展開してギリシャ・北欧等の神話を編んだのもこの集団の仕事である。

これらの 仕事は古代天皇の世界巡行につき従ったり、また使命を帯びて日本語出発して行った人の事蹟である。さらに鵜草葺不合王朝の中期を過ぎると高天原日本の伝統の真理を求めて世界各地から日本の皇室めざして賢人・学者がいわゆる留学生として来日をするようになった。

その留学生の中には伏羲・神農・モーゼ・老子・孔子・釈迦 さらに続いてイエスキリスト・マホメットの名

が竹之内文献に記せられている。古代の日本の皇室はそれらの留学生に言霊布斗麻邇の原理を伝授し、同時に将来の人類文明創造の経緯におけるそれぞれの使命・役割を定め担当させたのであった。

その 293 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

歴史とは 14

その 293

歴史創造の方針の転換

鵜草葺不合王朝の後半に到り人類の第一文明である精神文明は隆盛を極めた。同時に 外国における月読命・須佐男の命の仕事も 漸（ようや）く活発となり、成果をあげ始めてきた。第一の精神文明による国家の樹立は確かに成功した。半面第二の文明である物質文明の創造は漸く今始まったばかりである。

物質の研究は人間の欲望を土台とし、破壊分析を手段として発達する。いわばその研究の精神基盤は競争であり闘争である。精神文明をこのまま存続させ、その恩恵として鼓腹撃攘（こぶくげきじょう・世の大平を楽しむこと）する精神的満足の世界においては物質研究完成はどれほどの年月を要するか計り知れない。そこで人類文明をさらにゆるぎないものにする物質的繁栄を人類に速やかにもたらすために、高天原日本において文明や経営の方針の大転換が決定されたのであった。

右の大転換された方針の大略を次に記す。

- 一、第一文明である精神文明の基本である言霊布斗麻邇の原理を物質探求が一応の完成を見るまである期間高天原日本において隠没させ、人類の顕在意識から忘却させてしまうこと。
- 二、この精神原理の隠滅によって当然招来されるの精神荒廃時代における民族の假（かり）精神的

支柱となるべき宗教を世界各地におこすこと。またそれによる精神修養は将来第一の精神文明が甦るべき時の人類の心の準備としても有効である。

三、 右の精神荒廃の暗黒時代に起こるであろう各民族間の闘争を培養土として物質的研究を興隆させ、それによる経済と武器を手段として権力をもって世界の再統一を図る世界経営の責任者を決定すること

以上の大方針に従って日本ならびに外国において次々と現実的施策は実行に移されていった。それは鵜草葺不合王朝の終わりから、次に興る神倭王朝の初めにかけて約三千年程以前の出来事である。これにより人類は本格的に物質探求の第二の文明時代に入るのである。

その 294 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

歴史とは 15

その 294

外国の歴史 (二)

先に述べた如く鵜草葺不合王朝後半より外国の賢者・学者の来朝が盛んになった。竹之内文書によれば次の如くである。

伏羲 鵜草葺不合王朝 五十八代 御中主幸玉天皇の御宇

モーゼ 同 六十九代 神足別豊鋏天皇の御宇

釈迦 同 七十代 神心傳物部建天皇の御宇

老子 神倭朝 一代 神武天皇の御宇

孔子 同 三代 安寧天皇の御宇

日本の皇室は来朝した人を受け入れ、その人その民族に適した表現をもって言霊布斗麻邇の原理の教育を行ない、習得した後はそれぞれの故郷に帰り哲学・宗教の形式で各民衆を指導し、来たるべき数千年の暗黒時代における精神的支柱の役割を果たすよう使命を授けたのであった。

更に各宗教・哲学の祖として彼らの死後二百年ないしは五百年を経てそれらの聖書・教文等が編纂されるが、その編纂の計画には必ず日本から派遣された霊知りの指導があったことが伝えられている。

これらの仕事は言霊原理をそのまま説くことなく、その代わり呪示・表徴・概念・数字・哲学をもってする月読命の働きであるが、ただモーゼに授けた使命はその他の人と違ったものがあった。それは外国における須佐之男命の働きの中核として働く使命の伝達であった。

モーゼの来朝は鵜草葺不合王朝六十九代神足別豊鍬天皇の時代のことである。

贈り名は神のタル（足・十、トーラ、十誠）を頒（わかち）合えたという意味であり、豊鍬とは十四（豊）

の先天言霊を持つ布斗麻邇の原理を持ってする人類の歴史を推進させた（鍬）きという呪示である。

その 295 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

歴史とは 16

その 295

天皇は布斗麻邇の十の原理をヘブライ語のトーラして授け、その律法の運用によってその民族を統率し、
国家を樹立して、その民族が中核となってヨーロッパ民族ないし世界の人々を動かし、爾来三千年にわたって須佐男の命の使命である物質科学文明の開発、並びにそれによって得た経済・武器による権力によって世界の再統一を図る使命・職務を授与・命令したのであった。日本民族が天孫民族と言われるのに対し、イスラエル民族は神選民族と言われるゆえんはこの命令授与によるものである。

モーゼは教えられた布斗麻邇の原理に則り旧約聖書の五書（ペンタ・トーチ）を作り、精神構造の根本義を示すとともに民族の行くべき将来と使命を決定したのであった。

モーゼの日本来朝は彼がシナイ山に四十日四十夜籠もったと聖書に記されている時のことと考えられる。

彼が授けられたイスラエルの三種の神宝（アロンの杖、黄金のmana壺、十誡石）は日本民族の三種の神宝（剣・勾玉・鏡）と同意味のものである。この三種の神宝は契約の箱に納められエルサレムの神殿に祭られていたが、ソロモンの時には既になかったと聖書にされている。それ以前に日本に返還されたのである。

モーゼの十誡に 表十誡と裏十誡があると 竹之内文書を伝えている表十誡とは旧約聖書にある「殺す勿れ、姦淫する勿れ・・・」の十箇条の道德律であるが、裏十誡とは言霊布斗麻邇の原理のうちの 言葉ウを中心にした精神構造である八父韻の並べ方すなわちアカサタナハマヤラワレの十音である。

その 296 につづく

歴史とは 17

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 296

このアカサタナハマヤラワの十音の真義と操作法がモーゼに与えられた事によって爾来三千年の世界の歴史の大綱が大きく決定づけられることとなる。このことを説明しよう。初め アカサタナハマヤラワの十音配

列は伊邪那岐大神の 禊祓の行法の中で三貴子のうちの須佐男の命の自覚内容として確立され、天津金木音図として高天原の五十音言霊構造の一つの内容として得られたものであった。

その主体である言霊ウが他の四つの母音と協調して行く時高天原世界の円満な運営となる。ところが人類の物質文明の速やかな発達を実現するために須佐之男命は高天原の言霊法則の制約を受けない外国に進発して行った。

これを言霊的表現を用いればウオアエイ五母音の強調体制である高天原の理想社会から言霊ウのみが離脱して独走を開始したことである。世界における須佐之男命の使命である言霊ウの独走の現象の実行者としての任務にモーゼが就くこととなったのである。

世界の生存競争時代の開始である。アカサタナハマヤラワの操作法はこの生存競争に絶対不敗の戦術である。このことをさらに詳しく述べよう。著者の師 故小笠原孝次氏の「第三文明への通路」を引用する。

全世界は須佐の男の命が本格的に活動する舞台となる。神足別豊鍬天皇とモーゼのとの契約すなわちいわゆる神の「旧約」によって須佐男の命の事業を世界に実現する選ばれた責任者がユダヤ民族である。ゆえに神選民族というのである。

須佐男の命のヘブライ語をエホバ（ヤーエ）という。初めエホバは人間の楽園エデンを創設した愛と英智なる神であった。高天原にあっては天照大御神も須佐之男命も共に完成された生命の布斗麻邇の内容であって、別に分離されたものでは無いのである。

しかるにある頃からこのエホバの神格は変化が起こった。愛と英智なる神でなくなって、聖書に示されるが如く戦の神、妬みの神、仇を報ずる神となった。このことがギリシャ神話における太古の平和的な神々タイタン神族が滅亡して、同じく戦の神、嫉妬の神であるオリンパス山のゼウス（ツオイス、ジュピター）の世になったことと同一の消息である。……

エホバはシナルの地に築かれた都市国家を破壊し、言語を乱して相通ずることなからしめ、民族を地に逸散させてバベルの混乱を生じさしめた。この部下のガブリエル、ラファエル、ミカエル、ウリエルと共に五大天使の一人であるルシファーを悪魔（サタン）として地におろして、人間を背後からそそのかして罪を行なわしめた。

高天原の組織から一人抜け出した荒ぶる神であり、「畔（あ）放ち溝埋め、瀕播（しきま）き、串刺し」（大祓祝詞）等の天津罪を犯した神、すなわちキリスト教で言う原罪の神である須佐男の命の暴挙を実際に行う者が神エホバ（ヤーエ）である。

それは「出雲八重（やえ）垣」の神であり、八重（やえ）事代主神である。何故にエホバの神格がこの如く変貌したのか聖書を神の経綸の書してひもとくものはを必ずこの疑問に直面しなければならぬが、本来善なるべき神が何故に魔神の所業を事とすることになったか。

その 297 につづく

歴史とは 18

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 297

高天原の経綸である皇運は進展して、鵜草葺不合皇朝末期より世界人類の歴史は第二文明の科学建設時代に入った。科学は元来事物を破壊分析する方法によって究めていく学問であるとともに、これを促進させるために特別な方便を設けることが必要である。その方便とはすなわち生存競争である。科学は生存競争、弱肉強食の社会を基盤として発達する。

しかし生存競争は完成された高天原、すなわちエデンの園における人類社会のあり方、営み方ではなく、人間生命の本来の意思に反する悪であって、人間の背後にあってその生存競争を教唆するのは神ではなくて魔神である。

須佐之男命が高天原から神逐（かむやら）ひ、に追われたことの一つの理由は、彼が高天原から一人抜け出して、母神の伊耶那美の神である黄泉（四方津）醜女（しこめ）の国において魔神となったことにある。その須佐之男命の応作がエホバである。

キリスト教だけの世界のこととして言うならば、そのエホバが歴史のある時期からこの魔神に変化したわけである。エホバがその天使ルシファーを悪魔に仕立てて地に下ろしたということは、エホバ自身が魔神として人間界に君臨したということと選ぶことがとろがない。

かくして全世界は漸次高天原日本の教庁からの愛と英智による指導から離れて、荒ぶる神、罪を科せられた神、天津罪を犯した神、すなわち須佐之男命と、戦の神、妬みの神、仇を報ずる神、人間に原罪を犯しめた神、すなわちエホバ、ゼウスが支配する地獄・餓鬼・畜生・修羅の巷に変貌していった。

世界を指導するものの神格の変化は直ちに現実の歴史の変化である。竹内文献によれば遠い太古から例とされていた天皇の世界巡幸も、世界五色人王達の来朝も鵜草葺不合皇朝の末期にはその跡を絶った。

千（ち一）道）早振る神代は精神文明の時代であった。人間の精神原理である布斗麻邇の展開として道義のみが世界の権威であった時代である。この人間社会、娑婆世界は 劫初から浅ましい生存競争の坩堝であったわけではない。それは歴史的にはたかだかわずか三千年或いは四千年のこのかた、世界の指導を競輪者である天皇の宏謨（こうぼ・広大な計画）によって方便として特殊に仕組まれて、人為的

に現出した社会相である。

その 298 につづく

歴史とは 19

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 298

この生存競争の社会に生存するためにその競争相手に勝たねばならぬ。その時何が闘争に 手っ取り早く勝利をもたらすかと言うと、信仰や道徳でなくて、簡潔に言えばあらゆる意味における科学の優秀性である。……近代産業においても科学と経営上に優秀な技術を持った企業のみが 経済社会に生き残る。……

高天原の道義政治時代が世界において一応終了したとき、新しい世界経綸の方針と計画に参加する

思想の構造として人間の基本理念に名付けられた称名が須佐之男でありエホバである。

その理念の実行者がモーセであり、イスラエル民族であり、そのための教えが旧約聖書の半面であり、シ
オンプロトコル（ユダヤ民族の世界征服の陰謀）である。それは元来善なる神が三千年間の暫時
（ざんじ）の方便として悪魔の仮面をかぶった姿である。新劇の 仮装舞踏会に悪魔に扮装して登場した
ものがユダヤ民族なのである。……

ユダヤ民族が高天原の天孫民族と並んで、光栄ある神選民族である所以はここまで掘り下げて究め
なければその真意義を明らかになし得ない。モーゼのイスラエル建国の企画の奥には かくのごとき遠大深
刻な目的が 臆されてあった。そのモーゼに三種の神器の使用を許可し、これと相まって三千年の計画を
実行せしめたのが鵜草葺不合皇朝の神足別豊鋤天皇であられたのである。

長く師の文章を引用したが、それはモーゼのイスラエル国家の建国とそれ以後のヨーロッパ諸民族の経営さらには爾来三千年世界の弱肉強食の権力による歴史の原因をよく説明し余すところないことによる。

竹内文献によればモーゼは日本の皇族である 大室姫命（ローマ姫）を妻とし、その子ロミラスが生まれ、彼は「狼神に育てられた」と伝説されるローマ帝国の創始者であると記せられている。さらに文献はモーゼの再度の日本来朝と能登宝達山に薨（こう）じたことを伝えている。聖書の「今日までその墓を知る人なし」の記述はそのことを裏書きしている。

その 299 につづく

歴史とは 20

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 299

かくして世界は須佐之男命・大国主命・エホバが主催する 主催経営する弱肉強食の生存競争の時代に入った。この時以降は各民族・各国家の歴史が伝えるごとく国家・民族間の葛藤連続の時代が続く。世界の歴史書はこの時以降の記録には詳しい。そしてその時以前の世界の道着政治時代の記録は地球の表面から抹殺または時の来るまで隠滅されたのである。「焚書」（ふんしょ）とは秦の始皇帝のみの行ではなくて世界各地に行われたことである。

歴史に詳しいそれぞれの国の権力闘争の経緯についてはさておき、それら各民族の栄枯盛衰の底流をなし 原動力であったユダヤ民族のその後の動向に注目しよう。モーゼのその民を率いてのエジプト脱出、それに次ぐイスラエル建国後その国家の繁栄が続いた。

ダビデ・ソロモンの時繁栄はその頂点に達する。ダビデ時代にその民族の三種の神宝は日本に返還された。

この事件は次に続くユダヤ民族の行動と密接な関連がある。その国家はイスラエルとユダヤ両国に分裂し、遂に両国は滅亡する。

そしてその民族は世界の全地に逸散することとなった。先にエホバはバベルの混乱によって人々の言葉を乱し全地の表に散らした。そして今や彼自身の民族の国を奪って世界に散らす。それは彼らを他の諸民族の中に入らせ、人類の背後に立たせることによってよりエホバの究極の目的を速やかに達成させるためである。

ユダヤ即ちヘブライ民族は彼らの指導者である預言者の黙示に従って東と西に民族移動を開始する。旧訳イザヤさらにダニエル書に「この故に汝ら東にてエホバを崇め海のしまじまにてイスラエルの神エホバの名をあがむべし。我等地の極より歌をきけり。曰く栄光は正しき者に帰すと。」（イザヤ書 24 章 15 節）

「彼は海の間において美しき青山聖山に天幕の宮殿をしつらはん。・・・その時汝の民の人々のために立つところの大いなる君ミカエル起きあがらん」（ダニエル書 11 章 45 節）と見られる如く、その予言に従ったユダヤの 12 氏族のうち宗教的 部族レビの一団は東に向かい、いわゆるシルクロードを経て極東に姿を現し、中国やその東北部に入り、それぞれの民族の内部に入り込んで勢力を張った。中国東北部の殷を滅ぼし週以降秦・漢等は西方から入ってきた異民族の国家である。

その 300 につづく

歴史とは 21

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 300

さらにそのユダヤ人たちは海を渡り最後の民族移動をして日本に渡来して漸次帰化した。そして次第に日本の政治の中心に深く関係を持つようになった。今までの歴史書をかくの如く中国大陸または朝鮮よりの渡来帰化人を朝鮮人または中国人と記しているが、実は彼らは古来からの東洋の住民ではなく、西方より渡ってきた異民族系の人々である。

かくのごとく「海の間において美しき聖山に天幕の宮殿をしつらはん……」と予言された渡来のユダヤ人の目的はなんであるのか。民族移動の最終目的地を日本と定め 艱難辛苦して渡来してくる彼らの目的はなん何なんであるのか。

この目的は明らかにするためにユダヤ十二部族のレビ続以外の十一部族の行動と合わせ注目しなければならない。レビ族の東進に対して他の部族は滅亡の祖国を離れて 西進を開始する。国土を失った彼らはヨーロッパの各国・各地の民衆の中に入り、その経済的地位を確立し、しかも彼らユダヤ人としての団結を損なうことなく、その上政治の裏にて社会・国家の生存競争を指導して行った。

優秀な知力と豊かな財力は彼らの武器となった。爾来約三千年間生存競争の中の必然的に育った物質科学文明とそれを手段とする武力と権力をもって世界を統一し、西進の末に彼らの神工ホバすなわち大国主命すなわち須佐之男命の魂の故郷である日本===そこに先に東進した中間仲間レビ族の子孫が待っている日本に彼らの大きな成果を引っさげて帰ってくることを、それか神に選ばれたユダヤ民族の使命なのであり、日本をめざして東進・精進してくる彼らの目的である。

その 301 に続き

歴史とは 22

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 301

ユダヤ民族に この使命を与えたのは直接には神足別豊鍬天皇であり、その命令の主眼は古事記にある伊耶那岐の大神の須佐之男命に示した「汝が命は海原（うなはら）知らせ」の命令である。海原とは先に説明した如くウの名の原（領域）のことであり、現識に基づいた物質文明の分野である。

以上の如き人類の三千年の歴史を呪示した神話を二つ挙げておこう。一つは毎年行われ七月 7 日の七夕の行事である。陰暦七月七日の夜、天の川を東西にある牽牛と織女の二星が年に一度会うのを祭る。

これは高天原から神逐ひに外国に出奔した須佐之男命が三千年にわたる辛苦の末その成果である物質文明全部を携えて再び姉神である天照大御神の存す高天原に帰還報告することを預言呪示した行事である。

織女とは空間が空間五母音と時間八（十）父韻とを経緯（たてよこ）に文明の歴史という布を織り創造して行く経緯者としての天照大御神を示し、牽牛とは見識である言霊ウが静まる一般大衆を牽いで物質世界をリードする須佐之男命表わしている。七月七日とは七七 四十九で、易に「大衍の数五十、その用四十有九」と示されているアイウエオ言霊五十音の原理運用の法則を呪示する。

その 302 につづく

歴史とは 23

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 302

その二出雲風土記に見られる次の文である。「今者国引訖詔而。（いまは くにひきをえぬとのりたまいて）意宇杜爾御杖衝立而。（おうのもりにみつえつきたてて）意恵登詔。（おえとのりたまひき）故云意宇。（かれおうという）」国を引くのは古事記大国主命の系譜に見える八束水臣津野命（やつかみずおみつぬのみこと）。

国引きとは須佐之男命・大国主命の応作工ホバ神の事業の実行者であるユダヤ民族が物質文明を手段とした 武力・権力をもって世界を統一する任務を呪示する。この国引きの手段は言霊オとウすなわち経験知と言霊ウ欲望の森（分野）の判断原理（御杖）によっている。

そして国引きである世界統一 終えた時、意恵（おえ）と言った。それは終えと言霊オ工とを掛けている。権力による世界統一を成し終えた後は、欲望の世界の経験知である言霊オは高天原の主宰天照大御神の持言霊工と合体して、神逐ひ以前の言葉原理による道義の政治の世界を再び顕現しなければならぬのである。

すなわち西進したいユダヤ民族は科学文明の成果を携えて先に東進した自分の仲間が待っている高

天原日本に到達する。モーゼ以後三千年の世界の歴史の大綱はこれに尽きると言って決して過言ではない。

読者は以上の神話引用の説明を読んで、歴史書が世界の実際の現象を書かずにあまりに抽象的事実にすぎると思われるかもしれない。しかしながら読者が一度言霊学の大要を理解し、人間生命の全性能であるアオウエイの五母音の働きとその次元相違を明確にした上で、その眼でもって過去三千年にわたる人類の歴史、その中における特殊すべき歴史事件またそれらの底一貫して大きな歴史の筋道を洞察されるならば、今・此所に生きている自分自身の中に息づいている全人類の魂としての歴史をなるほどと了解されるであろう。

その 303 につづく

